



「私はデイサービスに行かない。」「先生」にあいさつしなきゃ。不安そうなお顔でソワソワと歩き回る園田さん（仮名・八十代女性）は、ユアハウスの通いサービスを利用して始めて日が浅く、来所するたびに、こうおっしゃっていました。

以前は他区のデイサービスを利用していましたが、認知症の症状が進行してきたため、主治医が施設入所を勧めました。しかし、ご家族の「住み慣れた自宅での暮らしを続けさせてあげたい」という思いと、ご本人の「施設は嫌」との意思から、デイサービスの管理者さんが、ユアハウスを紹介してくれました。

しかし当初はひどく混乱しました。私たちやご家族が説明を何度繰り返しても変わらず、スタッフを受け入れてくれません。ご家族は「やっぱり認知症が進んできたからでしょうか。事業所を替えずに、思い切った施設に入れるべきだったのでしょうか」と、後悔を吐露されました。

繰り返される不安の訴え。私は園田さんの言葉を何度も聴き、説明をしまし。それでも園田さんはデ

隠れた意思知るヒント

「ユアハウスに行きたい」という訴えを続け、かなわない事実を寂しそうな表情をさらしていました。

そこで私はスタッフと話し合い、園田さんに一つの提案をしました。

「私と一緒に、前のデイサービスの先生にあいさつへ行きませんか」。園田さんは「いいの？」と、驚きと喜びの表情を見せました。

その当日、園田さんは「今日はあなたとデイサービスに行くのよね」と予定を覚えていました。私は園田さんの車椅子を押して、地下鉄を乗り継ぎました。まだ暑い夏のころだったため、園田さんはデイサービスの皆さんにお土産を買いたいと、アイスを選びました。

「先生」と呼んでいた管理者さんに会った園田さんは、慣れた場所と人を懐かしむような表情でした。ユアハウスでは、まだ見せたことのないお顔。デイサービスでの写真を見て、思い出話に花が咲きます。おしゃべりの中で、管理者さんは「今は金山さんのユアハウスに行かれてるんです



3人で記念撮影。左から「先生」、園田さん、筆者

「先生」に別れのあいさつしたい

「よね」と何度か園田さんに言い、園田さんは「そよよ」と笑顔で答えました。私たちは二人で写真を撮り、帰りの道には喫茶店でスイーツを食べて、ユアハウスに戻りました。

園田さんの記憶障害は治るものではありません。進行していくものです。しかし、この小旅行以来、園田さんは一金山さんと一緒に甘いもの食べたわね」と私の顔を見るたびに言うようになり、「先生へのあいさつ」の話は全くしなくなりました。

認知症がある方の言葉は「また同じことを言っている」と軽視されがち。どうせ分からない、忘れる、覚えられない、と思われれるものです。しかし、その繰り返される言葉の中にこそ、ご本人の意思や満たされたい願い、介護のヒントがあるのです。

園田さんの訴えは、認知症だから同じことを繰り返していたのではなく、「先生にちゃんと別れのあいさつをしたい」という当たり前の礼儀だったのです。認知症になったとしても、今まで生きてきたように、当たり前の生活を送る応援をする。介護の大切なことなのだと思います。

（金山峰之 介護福祉士
・三十二歳）

小規模多機能型居宅介護事業所「ユアハウス弥生」

（東京都文京区）のスタッフ
が、介護の実践を報告する。

次回（十一月二十二日）掲載